

# 第3版はしがき

本書の第2版を2014年に刊行してからすでに3年が経過した。少し前に改訂したばかりと思っていたが、今回の改訂作業を通じて、その後も、本書のような初学者向けの教科書においても取り上げるべき法律の改正や新判例がかなりあることに改めて気づかされた。第3版としての改訂においては、国会でなお審議されており、まだ成立していない民法改正を除いて、この間の新たな立法および法状況の変化をできるだけ反映させたつもりである。

もちろん、初版以来の編集の基本方針（後掲の「はしがき」参照）は変えていないが、第2版のときと同様に、次のような具体的な方針のもとに改訂を行った。

第1に、この間の立法および判例の重要な動向、とりわけ2016年に公布された消費者契約法と特定商取引法の改正を取り込む。その際、第2版以後の時の経過を反映させた加筆・修正も行う。

第2に、本書に収録されている資料や統計は可能なかぎりアップデートする。

第3に、本書をさらに読みやすくするために一部の文章表現などを修正し、また叙述の統一性を高めるように努める。

なお、本書全体の構成や各講の位置づけについては、「本書の構成と読み方」および第16講「民法の世界を整理したら」を参照してほしい。

法学教育もまた大きな変化の過程にある。新しい法曹養成の仕組みとして登場した法科大学院制度は、発足後10年を経て、法学部教育との連携のあり方を含め、今日の社会の要請を踏まえたうえでの検証が必要な状況にある。

他方で、過労死や長時間労働、消費者被害の拡大、成年年齢引き下げ、家族の多様化にともなう問題などに直面して、法的ルールが一般市民や社会に浸透する必要性が高まるとともに、それを支える教養としての法学教育が、これまで以上に重要になっている。

私たちは、本書が、そのような法学教育の果たすべき役割の一端を担い、初版と同様に、初学者に対する法学・民法教育のニーズに応じて、多くの読者に受け入れられることを望んでいる。

最後に、今回の改訂にあたって、野田三納子さんに大変お世話になった。心からお礼申し上げます。

潮見佳男  
編者 中田邦博  
松岡久和

# はしがき

本書『18歳からはじめる民法』は、法律文化社の「18歳から」シリーズのうちの一冊として企画された。本書は、法学部生の民法入門用教科書として、また法学部生以外の教養民法用教科書として利用可能な教材を提供するため、いくつかの新たな試みを行っている。

本書の第1の意図は、大人（20歳）として扱われる直前にある人（法的には、未成年者とよばれる）に、自らの生活空間においてどのような法的な問題があるのかに気づいてもらうことにある。その解決の社会的ルールは、いうまでもなく法的なものだけではなく、複雑である。社会人としての第一歩は社会のルールを知ることから始まるといわれるゆえんである。法は、そうしたルールの中でもきわめて重要な位置を占めている。この意味で、法的問題に焦点をあわせた本書の企画は必要性の高いものであるといえよう。

こうした企画の趣旨を受けて、編者を中心とする編集会議において本書に盛り込まれるべき内容とその説明方法について議論を行った。その結果、読者が18歳という人生のステージに立っていると想定して、その目線から「18歳」の日常生活に民法がかかっていることを意識させ、その学習への意欲を高めることに重点を置いた入門書を編集することになった。具体的には、18歳の大学生Aさん自身が日常生活において経験する可能性の高い典型的なトラブルや、あるいはAさんの見聞する（その家族、友人たちをめぐる）身近な法的問題を取り上げて、その法的問題の所在と内容をやさしく解説することで、民法の重要な骨格を提示することにした。本書の利用の仕方については、さらに、後掲の「本書の構成と読み方」を参照されたい。

本書の題名に、「18歳」とあるのは、読者が未成年者であることを前提にしているだけでなく、「18歳」が社会的には「大人」として扱われる可能性をもつ存在であることも意味している。冒頭で、大学の教科書としての利用を想定していると言っていたが、本書は高校を卒業して社会人となっている18歳にもぜひ読んでもらいたい。未成年者であっても社会人であれば、「大人」＝社会人として法的問題を処理しなければならないことがあるだろう。そのときには、本書を手にとってほしい。こうした年齢層の読者に「大人」になる階段をのぼる準備の一つとして本書が利用されることを望んでいる。ひととおり民法を学んだ法学部の学生にとっても、本書は具体的な民法の姿を再発見するきっかけを与える書物として役立つのではないかと考えている。

最後に、編集の過程において編者サイドから、新しい読み物として世に出したいという思いで数々の要望を行なったが、執筆者の皆さんはこれに快く応えて下さった。ご協力に心から感謝する。本書の編集については、企画段階から、法律文化社編集部の小西英央さんと野田三納子さんに大変お世話になった。ここに、あらためてお礼を申し上げる。

編者 潮見佳男  
中田邦博  
松岡久和